



【典礼部だより】 3月の典礼暦から～枝の主日・受難の主日～

3月29日の「枝の主日(受難の主日)」から始まる聖週間の典礼は、キリストの受難と十字架を通した復活の栄光、約2千年前の決定的な救いのできごとを神秘的に再現していきます。その典礼に参加するわたしたちは、傍観者ではありません。

「枝の主日(受難の主日)」のミサでも、それがよく表されています。開祭では、わたしたちは実際に『棕櫚の葉を手を持って、救いの主を迎え』(カトリック聖歌集196)、エルサレムの城門で『ダビデの子にホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。いと高きところにホサナ』(マタイ21・9)と叫ぶ群衆の一人になります。

福音書朗読(今年はマタイ27・11-54)では、イエスを司祭、語り手を第1朗読者、群衆をわたしたち、他の登場人物を第2朗読者が担当し、イエスの受難のようすを再現します。ミサにおいて司教・司祭・助祭以外が福音書を朗読するのは1年を通してこの日だけです(聖金曜日の

えだ しゅじつ じゆなん しゅじつ 「主の受難の祭儀」に同様の福音書朗読がありま

すが、あれはミサではありませんので)。

この朗読の中で、群衆は、バラバとイエス様のどちらを釈放してほしいのかという問いに対し『バラバを』、ではイエス様をどうしたらいいのかという問いに『十字架につけろ』、イエス様がどんな悪事を働いたのかという問いにも『十字架につけろ』、あげくの果てに『その血の責任は、我々と子孫にある』と叫びます。

ついさっき、イエス様に「ダビデの子にホサナ」と叫んでいた群衆がこの有様。そして、その群衆の中にわたしたちもいます。毎週のミサで「救いの主を迎え」ながら、日々の生活の中では無意識にイエス様以外の誰かを選び、イエス様に対して「十字架につけろ」と言っているに等しい状況は、実はわたしたち一人ひとり誰にでもあ

ることなのではないでしょうか。
典礼部/〇〇〇〇 監修：ルスニ神父・シスター今田

しゅ あしあと じゅうじか みちゆき 【主の足跡をたどる】「十字架の道行」について

3月8日・15日・22日の主日には、日本語ミサの後、「十字架の道行」が行われます。これは、イエス様が死刑宣告を受けられてから十字架上で亡くなられ葬られるまでの14の場面(これを「留」といい、聖堂の左右・後方の壁面にそれぞれの留を表す額が掲げられています)に沿って受難の道をたどり、黙想する信心業です。

初代教会の時代から、信徒はキリストの受難の足跡をたどって黙想していました。それが「十字架の道行」の形になってきたのは14～16世紀

のことです。留の数やそれぞれのタイトルについては、18世紀までに教皇庁が第1～14留を定め、その後、聖ヨハネ・パウロ2世を含む多くの典礼学者がご復活をえがいた「第15留」の必要性を強調した結果、今の形になっています。

受難・十字架についての黙想ですから、本来は日曜日(ご復活を祝う日)にはふさわしくない信心業ではありますが、「十字架の道行」の伝統が廃れることを恐れ、この四旬節に皆で祈る機会をつくることとしました。
典礼部

3月22日のミサ後、教会委員会が開催。3月29日「枝の主日(受難の主日)」のミサ後は大掃除です。

【四旬節黙想会まとめ】指導司祭：イエズス会 川村信三神父様



川村信三神父様

2026年3月1日、イエズス会司祭・上智大学文学部史学科教授の川村信三神父様をお迎えして行われた四旬節黙想会の講話は、黙想、告解、歴史、そして現代の信仰実践までを一つの流れて示す内容でした。前半の黙想では、ルカ福音書5章の「漁の奇跡」におけるペトロの言葉「主よ、

私から離れてください。わたしは罪深い者なのです」に注目し、それを単なる罪の告白ではなく、「すでに赦されている喜び」に触れた者の畏れと決意の表れとして解釈しました。告解（ゆるしの秘跡）の中心は罪の申告ではなく、「賛美の告白（confessio laudis）」、すなわち赦しへの確信と感謝、そして新たな一歩を踏み出す決意であると強調されました。また、「今日1日、私は絶対幸せです」といった肯定的宣言が心の向きを変え、赦された喜びを日々受け取る姿勢を育てること、恐れに支配されない信仰の態度の大切

さも語られました。歴史的考察では、1549年のザビエル来日以降、約50年でキリスト者が急増した背景として、教会堂建設だけでなく慈善活動が大きな役割を果たしたことが紹介されました。大友宗麟の支援、ルイス・デ・アルメイダによる乳児院構想、日本の西洋医学病院の設立、そして信徒主体の「ミゼリコルディア（慈悲の組）」による医療・看護・葬祭・貧者救済などの実践が、福音の具体化として社会に希望をもたらしました。マタイ福音書25章に基づき、貧しい人や病者をキリストそのものとして遇する姿勢が、日本社会の差別的構造に挑戦した意義も示されました。

禁教下においても信徒が教会を支え、家庭で信仰を守り続けた歴史に触れつつ、現代への提案として、小さな祈りのグループやロザリオ、聖書朗読、病者訪問などを自発的に再活性化することが勧められました。日曜ミサに加え、日々の短い祈りや黙想を積み重ねる「信心業」によって信仰を深めることが招かれ、希望のうちに講話は締めくくられました。 広報部/〇〇〇〇

【告知】JOCS活動報告会『小さいものからくる平和』のお知らせ

JOCS（公益社団法人日本キリスト教海外医療協力会）は、日本で最初に設立された国際協力NGOであり、「医療を通じて、愛を世界へ。」を合言葉として保健・医療に恵まれない地域における医療事情向上を支援しています。

今回、JOCSワーカーとしてバン格拉デシュに派遣され、知的障がいのある子どもとその家族を支援するプロジェクトの責任者として活動する岩本直美さんの活動報告会『小さいものからくる平和』を、右の通り水戸教会で開催していただくことになりました。

岩本直美さん活動報告会 『小さいものからくる平和』
2026年3月20日（金・祝日）、10時からのミサ後、11時前後から約1時間、信徒会館にて

イエス・キリストの教えに従い、困難の中にある人々の健康といのちを守り、人々と苦悩・喜びを分かち合う岩本さんの働きから学びを深めたいと思います。皆さまぜひご参加ください。

典礼部/〇〇〇〇